



令和5年
12月8日(金)

当事者意識をもって学ぶ

期末テストも終え、大きな学校行事は終わりましたが、いつも目の前に次なるめあてとなるターゲットを持つていたと思います。

「人権週間」に合わせ、生徒会が中心となって「ピンクシャツ運動」が始まっています。いじめ反対のメッセージを「ピンクシャツ用紙」に記入後、中央廊下に掲示されます。

いじめの問題は、当事者間だけの問題ではありません。自分自身の問題として捉えることが大切であり、さまざまな人権課題について考える機会の一つとしていきたいと考えています。

「ピンクシャツ運動」とは？

二〇〇七年、カナダでピンクのポロシャツを着た中学生がいじめられました。それを知った高校生がピンクのシャツなどを大量に購入し、メールや掲示板で友人知人などに着用することを呼びかけました。

呼びかけ以上の学生がピンクの服で登校し、学校がピンクに染まりはじめがなくなりました。

以降、毎年2月最終水曜が学校や職場にピンクのものを身につけて行くピンクシャツデーとしてカナダ全土に定着し、アメリカ・イギリスなど世界各国へ広まりました。

各学年の取組から、現状と今後の展開

【一年生】

昨日、小山田小・水沢小の六年生を迎え、「人權フォーラム」を開催しました。「名古屋城の天守閣にエレベーターを設置することの是非」を巡るオープンエンドの議論では、小学生をリードしながら、相手の考えを尊重しあい、考えを深めることができました。今後、障がい者問題に視点をあて、学習をさらに進めていきます。

【二年生】

絵本「ひらがなにつき」をもとに識字学級の取組について学び、「教科書をタダにする会」による教科書無償運動を通して、反差別の行動の大切さについて学習を進めています。これを受け、自身の周りに存在する不合理に気付くことや差別する側の問題としての捉えに視点を置いて、**部落問題学習を進めます。**

【三年生】

広島に投下された原爆で被爆した少女の日記と家族の話をもとに作成されたアニメ動画「夏服の少女たち」を視聴しました。これをもとに、「瞬にして尊い命や人々の絆を奪う戦争の非人道さを通して、人権の大切さを再確認しました。今後は、男女共生社会の実現に向けての学習を深めていきます。

遠き日の言葉を糧に「学校日誌」より

「授業の構成と展開に『一つのドラマ』がないと、子どもたちは生き生きと学習することができない。子どもたちが目をかがやかす物語を学習の中に位置づけることができるか否かによって授業の善しあしはきまる。…」

遠い昔、本校で教育実習を受けた折の指導教官の言葉です。まさに箴言であると感じつつ、毎日の学校経営を進めています。

わずかな違いに切り込む

既定の路線に乗せようとするドラマ性は失われます。生徒たちの発言のわずかな違いに拘って

教師が切り込み、やがては生徒たち自身が切り込んでくるように鍛えながら、一人一人の心に迫る授業づくりに取り組んでいます。



ひっくり返しと立往生

三年生理科は太陽の動きを学んでいます。その中で、「今日の南中高度は何度くらいだろう？」と問われ、多くの生徒の答えは六十・七十度に集中しました。あにはからんや、答えは約三十度。自分の感覚が見事にひっくり返された瞬間、思考が始まりました。

二年生社会は江戸時代の鎖国の学習でした。外交は皆無だったと思いきや、ちゃっかりオランダ・中国とは貿易を続けていた事実を知りました。三重県出身の大黒屋光太夫などの帰国した漂流民がいたことも含めて、確かな認識を持つてほしいと思います。

一年生国語の課題は、文字の美しい書き方についてでした。「美しい文字とは？」と、しばらく立ち止まって考えました。その後、テキストを見ると、「漢字より平仮名を小さく書くこと」等のヒントがあり、実際に書いてみて納得していました。

「拮抗」と後を引く終末

授業のドラマ性を高めるには、「拮抗」する場面が不可欠。生徒一人一人の拘りや問題意識を日頃から把握することが大事です。また、余韻を残した後を引く終わり方がよい授業の条件ともいわれます。とかく教師は「わかりましたか？」と聞きたくなるものですが、「わからなかった」ことから生まれる新たな「問い」が貴重であると感じています。

学校施設補修等の完了報告

金属疲労と腐食が見られた校地西側の防球ネットの撤去を完了しました。同時に懸念となっていた雑木も切り倒していただき、景観もずっとよくなりました。また、事故のあった側溝の蓋等の修理工事も終わりました。今後も、一層安全管理・指導に努めてまいります。

